国　語　科

宮本隆裕・船曳哲世・吉岡大泰・岡本恵里香

Ⅰ　「国語科本来の魅力」に迫るための，「教員の資質・能力」

わたしたちが知識・技能を獲得するとき，あるいは問題を解決するために思考し表現するとき，それらは，全て言葉を媒体として行っているといっても過言ではない。また，言葉の意味や働き，使い方に着目しながら関係性を問い直したり，新たに意味づけをしたり，自分の考えを形成し，深めるといった内面の働きにおいても言葉の役割は大きい。国語科は，学習者に言葉の力をつけ，すべての学びの基盤となり，人生をより豊かに生きることにつながる魅力をもっている。

また，国語科の授業の中で学習者が触れる文章は，物語や説明文だけではなく，詩や俳句短歌，随筆や随想，古文や漢文など様々である。そしてその一つ一つの作品は，時代を越えて多くの人の心をつかむ魅力をもっている。教材そのものに学習者を惹きつける力があるのである。

学習者はこのような言葉によって導かれる優れた作品世界を体験し，その体験から豊かに何かを感じる感性を育むことができる。さらに，その豊かな作品世界から自分の感じたことを友達と交流する過程の中で，自分とは異なる考え方や価値観が様々に表出されていることに気付くだろう。根拠としてどの表現に着目し，どんな理由づけをするのかによって同じ考え方でも違いが浮き彫りになってくる。こうした異なる考え方や価値観が全体の場で共有され，そこに含まれる矛盾や葛藤，対立などをさらに吟味・検討していくことで，さらに学習の深まりが期待できる。そして，自分の考えが何を拠り所にしてどう変わったのか，新たに気付いたことは何なのかを自分の言葉で整理し，自覚的にとらえることが自己の成長に気付くことにつながる。

このように，国語科では，「国語科本来の魅力」を，豊かな「言葉の」作品世界に触れ，「言葉を通して」友達とわかりあい，「言葉による」学習の深まりを自覚することを繰り返しながら，「他者と関わり自分自身と向き合うこと」であると捉えている。

では，学習者が，このような「国語科本来の魅力」に迫るためには，どのような「教員の資質・能力」が必要なのだろうか。

ここでは，教科書教材『まいごのかぎ』（光村図書三年上）を例に，文学教材の読みにおける教員の資質・能力（表１）のうちの「授業構想力」について具体的に述べていきたい。

まず，学習者の立場に立つと，学習者は読者として個々それぞれに様々な感情や考えを浮かべ想像を膨らませながら作品を読むだろう。例えば「わくわくすることがたくさん起こって楽しいな」といった思いや，「でも，どうしてこんなことが起こったのかな」といった考えが浮かぶ。そしてこういった学習者の疑問，物語の《問い》を全体の場で広げ，大切に価値づける授業を展開することで，さらに物語作品世界を豊かに想像することができる。例えば「もしかしたらうさぎのせいかも」「もしかしたらかぎのせいかな」「もしかしたら神様が落ち込んでいるりいこを元気にしようとしたのかも」というように，様々な想像で《問い》を解決しようとするのである。

このように学習者が読者として自分の知らなかった新しい世界を体験し，作品世界で描かれていない《空所》を，想像を膨らませながら埋めることで，作品世界をより豊かに楽しむことができることは，文学作品が本来もつ魅力の一つである。

また，教材としての物語作品には様々な特性がある。例えば同上『まいごのかぎ』では，ファンタジーの入り口と出口が見え隠れするといった構成上の特徴や，主人公であるりいこが心の中でどのよう

に感じているかを言葉にした《心内語》が地の文の中に多く隠れているといった文章表現上の特徴をつかむことも，児童が自ら読む力を身に付ける上で大切な視点である。

さらに作品に隠されているテーマも，文学作品が本来もつ魅力の一つであろう。「うさぎは，もともとどこにいたのだろう」といった《問い》から，「図工の時間にりいこがかいた絵の中」という答えにとどまらず，さらにうさぎは，「なんだかさびしかったので，つけ足した」りいこの心の中にいた生き物であることに気付き，そのうさぎを消してしまったことから，「りいこは，うさぎを消したことで，自分の心の中から何か大切なものを失ったのではないか」と，文学作品に隠されたテーマに迫ることができる。このように問いを解決しようとすることが，主人公であるりいこのことだけではなく，個々の学習者が自分自身についても考えるきっかけとなり，作品世界をより豊かに楽しむことができる。

以上のように教材のもつ特性を教員の視点から的確に把握し，その魅力を最大限にいかしながら，他者と関わり自分と向き合う学びを創造することが，国語科の教員の資質・能力として重要な「授業構想力」であると言えるだろう。「授業実践力」や「授業分析・評価力」については，表に示した通りである。

資質・能力	視点	教員の資質・能力の具体
授業構想力	目標設定	・例えば学習者が問いをもつことで思い浮かんだ自分の考えを，他者と交流しながら学習を進めるなど，学習者が学習の目標を設定することを，教員の立場から適切に支援する力。
	教材研究（開発）	・例えば作品が作られた背景や作品のもつテーマ，文章表現の特徴など，教材のもつ特性を的確に把握し，学習者の発達段階を考慮しながら，他者と関わり自分自身と向き合う単元を学習者とともに創造する力。
授業実践力	指導技術	・例えば動作化を行ったり登場人物の心情を色で表したりするなど発達段階にあった「手立て」を練ったり，学習者の意見や理由，根拠を，教員の立場から適切に意味づけたり価値付けたりしながら，目標に向かって学習者間で豊かな言葉が行き交う学びを支える力。
授業分析・評価力	授業分析評価	・例えば学習者がどのように作品を読んでいるのか，教員による問いかけや，学習者同士の対話の中での発言や，学習者の記述から的確に把握し，学習者の変容を絶えず授業改善にいかす力。

［表１］ 国語科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力（文学領域）

Ⅱ　めざす子ども像

「国語科本来の魅力」に迫る学びの中で，豊かに言葉を紡ぎだす子ども

これまで述べてきたように，他者と関わり自分と向き合う学びを繰り返している子どもは，自分を強く持つことができる。他者と関わり自分と向き合うことで，「視野を広げたり深く自分の心の奥底の中に入り込んだりして未知の自分を吸収する」ことや，「自分が自分であることを支える」ことができるようになるからである。国語科ではこういった強さをもつ子どもを育てたい。

例えば国語の学習の中で表現豊かな物語に触れ，今自分のいる現実とは違う世界に引き込まれる。登

場人物の鼓動をそばで感じ，人物同士が織りなす物語に耳を傾ける。いつしかその世界の中に自分が入り込み，その情景に心踊らされる。その中でふと立ち止まり新しい自分に気付くだろう。それは時にはその物語の世界で生きる登場人物との見方や感じ方との違いから気付くかもしれない。またときには日常感じていない感情が心に浮かんだ時に，今までとはちがう自分に気付くのかもしれない。

そういった経験を繰り返す中で，児童は「自分が自分であること」を支えられるようになる。現実の世界だけではなく，様々な世界の中に入り込み，自分を知る。自分とはこのようなものなのだと自己を確立していく中で，言葉は豊かに語られるようになる。自分を強く持つ子どもの姿である。

また，ときには登場人物をまるで自分のように感じ物語を進める。登場人物のそばから離れ少し遠くからその世界を見つめることもあるだろう。ページをめくりその物語の世界を進めていくうちに，自分の中に浮かび上がってきた感情や思いを，誰かに伝えたいと思う。そしてより鮮やかに伝えようと誰かに夢中で語りかける。こういった子ども達の言葉は，何かを伝えようと懸命に言葉を選ぶ，まさに豊かに紡ぎ出された言葉になっている。さらにそれぞれが感じたそれぞれの心の中に生まれた物語に興味をもち，違いを認め合ったり共感したりしながらさらにまた語り合う。このような学びを創造したい。

このように「国語科本来の魅力に迫る学びの中で，豊かに言葉を紡ぎだす子ども」とは，新しい世界に触れ「自分が自覚していない奥底にあるもの（価値観・見方考え方）を吸収」し，「自分を支える」強さをもち，自分の感じたことや伝えたい内容をより鮮やかに，誰かに伝えたいと言葉に乗せて表現しようとする中で，自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す児童・生徒の姿なのである。

ここまで物語を例に豊かに言葉を紡ぎ出す子どもの姿を想像してきた。物語には子どもの世界を広げ自分を見つめ心の奥底にある自分という人間のより根本的なことに気付かせてくれる力がある。この物語のもつ力を大切にする「物語の読み」の在り方を「教員の資質・能力」の視点から考えていきたい。

Ⅲ　本年度の研究について

１　研究の目的

以上のような考えをもとに，本年度の研究テーマを次のように設定した。

国語科の研究テーマ

自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す「物語の読み」の授業づくり -「国語科本来の魅力」に迫るための「教員の資質・能力」に着目して-

物語を読む行為は，作品内の様々な人物（例えば，登場人物や語り手，聴き手，作者等）の立場に立って考え感じるという文学の体験である。読者は，作品を読み始めると，語り手の語りに誘われて，作品世界に入っていく。現実世界では，生身の読者が存在しているが，読者の想像の中では，自分の分身が作品世界に入っていき，様々な体験をしていく。登場人物の立場に立って共感したり，登場人物の言動を読者自身の立場に立って捉えることで疑問や怒りを感じたりと，様々な人物の立場に立って捉えていくことで，いろんなことを感じ考えていく。そして，物語を読み終えた時，作品世界を体験した読者は，これまでの自分と対話をする。「何を感じて考えたのか」，「これから自分はどんな人生を送っていきたいか」などについて自分と向き合って話していくことで，新しい自分を発見したり，深く考えたりする（難波博孝ら,2007，西郷竹彦,2008，田中実,2018）。

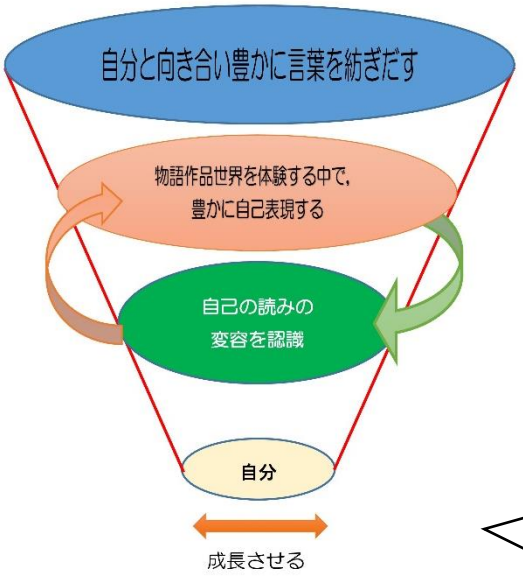

図２　豊かな言葉を紡ぎ出す子どもを育てる
「物語の読み」の授業づくりのイメージ

○物語作品世界を体験する中で，感じたこと，考えたことなどを豊かに自己表現する。
○協働的に学ぶ中で，個人の読みのずれや違いに気付き，自己の読みの変容を認識する。

物語作品世界を体験し，他者と関わり自分と向き合うことで，自分を成長させる。

このように，物語を読むことで自分を成長させることができるのは，物語が様々な人物の立場に立って対話できる構造になっているからである。さらに物語世界を体験する中で，「豊かな自己表現」を大切にする学びを繰り返すことが，豊かに言葉を紡ぎ出す子どもを育てる上で大切であると考えた。なぜなら，物語作品世界を体験する中で，自分が感じたことや考えたことを豊かに表現しようとすることで，物語作品と自己表現を何度も行き来し，自分を知ることになると考えたからである。また，交流により個人の読みのずれや違いを認識することも，自分を成長させるきっかけになると考えた。それぞれの読みのずれや違いを知ることで，「なぜ私はそう読むのか」「なぜ他の人は私と考えが違うのか」と自分について考えるきっかけが生まれるからである。

２　研究の方法

○ 「国語科本来の魅力」に迫るための「教員の資質・能力」を定義し（表１），自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す子どもを育てる「物語の読み」の授業づくりの新たな単元を開発する。
○ 物語作品世界から豊かに自己表現することを通して，他者と関わり自分と向き合うための教員の働きかけや手立てを幅広く工夫する。
○ ルーブリックを作成するなど，個々の学習者の姿を適切に見取り，絶えず授業を改善していくといった，評価に関する具体的な事例を蓄積する。

【参考文献】

西郷竹彦（2008）「文芸（虚構）の世界～西郷文芸学の新展開　その１～」文芸教育研究協議会編『文芸教育』87　新読書社
田中実（2018）「〈近代小説〉に神髄は不条理，概念としての〈第三項〉がこれを拓く」『日本文学』８，2018 年 VOL.67　日本文学協会編集
難波博孝・三原市立三原小学校（2007）『文学体験と対話による国語科授業づくり』明治図書
浜本純逸（2001）『文学教育の歩みと理論』東洋館出版社
松本修・桃原千英子（2020）『その問いは，文学の授業をデザインする』明治図書
山元隆春（2014）『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』渓水社